**「シュリー・ラーマクリシュナについての考察」**

2021年4月4日

シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会

スワーミー・メーダサーナンダによる講話

於・逗子本部別館

今朝、花をささげた後、次のようなプラナーム・マントラを唱えました。

*オーム* *スタパカーヤ* *チャ* *ダルマスヤ* *サルヴァ* *ダルマ* *スワルーピネ*

*アヴァターラ* *ヴァリシュターヤ* *ラーマクリシュナーヤ* *テ* *ナマハ*

普遍的な宗教を取り戻すためにお生まれになった、全世界の宗教の化身

神の化身の中でもっとも偉大なシュリー・ラーマクリシュナよ

私は偉大な神の化身であられるあなたに、何度も何度も敬礼いたします。

このプラナーム・マントラはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（スワミージー）がある機会に作りました。今朝歌った『オーム・フリム・リタム』はそれとは別の機会に作られましたが、後にこのプラナーム・マントラをその第5節として加えました。1898年2月に近しい信者であるナバゴパール・ゴーシュはベルル・マトからさほど遠くない自宅に聖堂を作ることにし、スワミージーに聖堂の開所式を執り行うように依頼しました。その時、スワミージーはシュリー・ラーマクリシュナへの礼拝をしながら、即興でこの2行のプラナーム・マントラを作ったのです。

**もっとも偉大なアヴァターラ（神の化身）**

シュリー・クリシュナ、お釈迦様、主イエスなどすべての神の化身は、真の宗教を復興させるためにあらわれました。スワミージーはすべての神の化身を深く尊敬し理解していました。それなのになぜこのプラナーム・マントラの中で、シュリー・ラーマクリシュナを最高の神の化身とみなしたのでしょうか？　私たちがシュリー・ラーマクリシュナには見いだせて、他の神の化身には見いだせないものとは何でしょうか？

ひとつは「サルヴァ　ダルマ　スワルーピネ（すべての宗教の化身）」である、ということです。例えば、キリスト教はイエス・キリストのメッセージをもとにしています。ヒンドゥ教はそれより以前から存在していましたが、主イエスがヒンドゥ教の実践をしたという確証はありません。しかし、主イエスの生涯には不明な数年があるので、インドへ渡りヨーガの実践を学んだ、というひとつの意見もあります。もちろん必ずしもそうであるとは限りませんが、その可能性はあります。お釈迦様は仏教の開祖です。ムハンマドはイスラム教の開祖です。このことから、その他の宗教も含めすべての宗教は開祖によって創設された、ということが分かります。

一方、ヒンドゥ教にはシュリー・クリシュナ、シュリー・ラーマ、シュリー・チャイタンニャなどの複数の化身がいます。バガヴァッド・ギーターは、シュリー・クリシュナの教えをもとにしていますが、そこには主にラージャ・ヨーガ、カルマ・ヨーガ、バクティ・ヨーガ、ギャーナ・ヨーガなど、複数のヨーガがあります。もちろん、シュリー・クリシュナがユダヤ教や、当時まだ創設されていなかったキリスト教、イスラム教の実践をしなかったということは言うまでもありません。しかし、シュリー・クリシュナの教えが総合的なヨーガ実践であることは疑う余地がありません。

**宗教の調和の確立者**

しかし私たちは宗教の歴史上はじめて、さまざまな信仰を実際に実践し、それぞれの道で真理を悟ったことをシュリー・ラーマクリシュナの生涯に見ます。シュリー・ラーマクリシュナはヒンドゥ教のヴァイシュナヴァ派、シヴァ派、ヴェーダーンタ派などの実践で真理を悟っただけではありません。種々のヒンドゥ教の実践に加えて、イスラム教やキリスト教を独自のやり方で実践したのです。このことが、スワミージーが作った賛歌の最後の「アヴァターラ　ヴァリスターヤ（もっとも偉大な神の化身）」の根拠となっています。すべての神の化身の中でシュリー・ラーマクリシュナただおひとりが、さまざまな信仰を実践し、それぞれの道で真理を悟り、母語ベンガル語で「ジャト　マト　タト　パス（信仰の数だけ悟りの道がある）」と言いました。全ての宗教はひとつの真理への異なった道以外のなにものでもない。この言明は実際の悟りにもとづく信念です！　学者や知識人がさまざまな宗教を学んで達した結論ではありません。だからこそ、この言葉は非常に深淵でこんなにも皆の心を打つのです。

さらにこの言葉は、今日の対立的な世界に大いに必要な「調和」の基礎の役割も担っています。今ほど技術が発達しておらず小型デジタル機器（携帯電話やゲーム機器など）があまりなかったころ、人はお互いにうまくコミュニケーションを取っていました。しかし、新しい技術を手に入れれば入れるほど、人と人は疎遠になっています。私たちは一人一人がまるで孤島のような存在です。イギリスの詩人サミュエル・コールリッジが「どこもかしこも水、水、水。それなのに飲める水は一滴もない！」と言ったように、私たちは人、人、人の中にありながら、孤独を感じています。これは矛盾ではありませんか？　どれくらいの人々がこの社会からの疎外感と孤独に苦しみ、他者とつながれていないのでしょうか？　日本ではこの現象を「引きこもり」（引っ込み閉じこもる）と言います。

この反応は、すべてのデジタル機器が作られた目的と正反対ではありませんか？　コミュニケーションを高めることが目的であったはずが、結果は真逆になっています。また、最近のデジタル機器は多くの安らぎの時間を与えることが目的だったのに、実際は逆効果で人はもっと忙しくなりました。昼も夜もなく、土曜もなく、日曜もありません。毎日が仕事の日です。そのために私たちは人と人の調和をもたらす方法を考えなければなりません。また、宗教と宗教、国と国の調和をもたらす方法を考える必要があるのです。そこで、シュリー・ラーマクリシュナが述べた調和の哲学、すなわち「ジャト　マト　タト　パス」という調和のマントラが求められています。この哲学を体現し提唱したという意味で、シュリー・ラーマクリシュナはもっとも偉大な神の化身である、と言えるでしょう。

**サットワだけに満たされている**

もうひとつの説明があります。サンキヤ哲学には、サットワ（バランス、平和、すべての良い性質）、ラジャス（活動的、野望などの性質）、タマス（不行動、鈍いなどの性質）、という三つのグナの考えがあります。シュリー・クリシュナとシュリー・ラーマは戦士でしたので、その神の化身としての生涯はサットワの性質が優勢でも、ほんの少しのラジャスも見られます。しかし、シュリー・ラーマクリシュナの場合、ほんの少しのラジャスもタマスもなく、サットワだけです。その意味でもシュリー・ラーマクリシュナはもっとも偉大な神の化身だと言えます。

さらに申し上げると、シュリー・ラーマクリシュナには、シュリー・ラーマやシュリー・クリシュナのような華やかさも威厳もカリスマ性もなく、超能力を見せることもありませんでした。外から見るとシュリー・ラーマクリシュナは、貧しく、へき地の田舎生まれで、ほとんど読み書きもできませんでした。コルカタ近郊の寺院の司祭であり、地元では「狂ったブラーミン」として知られるようになっていました。しかしその内側は、最高に神聖な性質を持つ方でした。

これまで私たちの見解の正当性を申し上げましたが、全ての神の信者にとって自らが選んだ神が最高であり、そのことに異議を唱えることはまったくありません。主イエスの信者にとってイエス・キリストは最高の神の化身ですし、お釈迦様の信者にとってはお釈迦様が最高です。スワミージーがキリスト教、イスラム教、仏教にも大いなる敬意を持っていたことは明白です。それとは別のこととして、先ほど申し上げた二つの点で、シュリー・ラーマクリシュナへのプラナーム・マントラのスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの主張には根拠があります。

**解脱の与え手**

シュリー・ラーマクリシュナの霊性の伴侶ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィーは女性信者にこのように言ったことがあります。「ねえ、巡礼中に聖者を何人か見たけれど、誰もシュリー・ラーマクリシュナとは比べ物にならなかったわ」　ホーリー・マザーは夫への愛と尊敬からそのように言ったのでしょうか？　それとも何かちゃんとした理由があったのでしょうか？　これを聞いたホーリー・マザーの女性従者で高い霊性の魂の持ち主ヨーギン・マーは言いました。「サードゥ（出家僧）の聖者とシュリー・ラーマクリシュナを比べてどうするのです？　サードゥはサマーディの経験と解脱を得るために一生懸命努力しているけれど、シュリー・ラーマクリシュナは解脱の与え手、サマーディの経験の与え手じゃありませんか！」　　ですから、シュリー・ラーマクリシュナと他の近代の聖人の比較はできるでしょうか！　シュリー・ラーマクリシュナはひと触れ、一瞥、もしくは単に望むだけで、他者に最高の霊的経験を授けることができた、とシュリー・ラーマクリシュナの直弟子のひとりスワーミー・シヴァーナンダは言いました。

皆さんの多くはナレンドラナート（スワミージーの出家前の名前）が、ブラフマンは遍在で、万物・万人に遍満している、というヴェーダーンタの真理を受け入れることができなかったことを思い出すかもしれません。実際、ナレンはブラフマンのその考えを面白がって冗談を飛ばすほどでした。「このポットがブラフマン？　この水差しもブラフマン？　そんなことあり得ますか？　神を冒涜していませんか？」それを耳にしたシュリー・ラーマクリシュナは、半ば忘我の状態でナレンドラナートに触れました。するとナレンドラはまさにすべての物は純粋な意識、ブラフマンである、ということを経験したのです。この経験は約一か月も続きました。ナレンドラは、すべてが純粋意識、サット・チット・アーナンダだと見たので、有機物、無機物、生物、無生物、車、鉄道、食べ物、給仕をしてくれる人を区別することができませんでした。　　　　　　　☞（『ラーマクリシュナの生涯下』391頁）

私たちは生物と無生物を区別しますが、その境界線は何でしょうか？　実際はどのように生物、無生物を区別していますか？　いわゆる無生物の各原子はとてつもない可能性に満ちていますね？　　例えばシュリー・ラーマクリシュナのほんのひと触れでナレンドラは「サルヴァン　カルイダム　ブラフマン（ブラフマンは遍満、遍在）」というヴェーダーンタの真理を完全に自覚し、生物、無生物の違いがなくなりました。

ある時、シュリー・ラーマクリシュナがお住まいのドッキネッショルの敷地内にあるカーリー寺院のそばの小さな木立パンチャヴァティで、スワーミー・シヴァーナンダが瞑想をしていました。たまたま通りかかったシュリー・ラーマクリシュナは足を止めてシヴァーナンダジーをちらりと見ました。その瞬間シヴァーナンダジーはクンダリーニが上昇したのを感じ、圧倒的な霊的経験の歓喜でわっと泣き出しました。そのような霊的経験には何年にも渡る霊性の努力と実践が必要ですが、シュリー・ラーマクリシュナはシヴァーナンダジーに一瞥を送っただけでその経験を授けたのです。シュリー・ラーマクリシュナは、霊性を生み出し霊的経験を授ける、巨大な霊性の発電機のようでした。

**たとえ話と例を用いる達人**

シュリー・ラーマクリシュナが教えを説くときには、聞き手に印象が残り、内容がよく理解できるように、たとえ話を用いました。お釈迦様や主キリストのような偉大な霊性の師もよくたとえ話をなさいました。『ラーマクリシュナの福音』の中には多くのたとえ話の引用がありますが、その内容を生き生きと劇的にするために、シュリー・ラーマクリシュナは話に合ったジェスチャーやポーズ、登場人物の声真似もなさいました。上手い役者のようにたとえ話でメッセージを完全に伝えようとしたのです。実際、霊性の師は、ちょっとしたジェスチャー、ポーズ、声真似などのテクニックを使わずにはいられません。なぜなら、そうすることで聞き手への影響が続くからです。シュリー・ラーマクリシュナはこのテクニックの達人でした。シュリー・ラーマクリシュナの代表的な在家信者のギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは当時の偉大な舞台俳優で演出家、演技指導、そしてシナリオ作家でした。そのギリシュ・チャンドラ・ゴーシュが、シュリー・ラーマクリシュナから演技について学んだことがある、と言ったほどです。

シュリー・ラーマクリシュナは、哲学の多くの難解な点を例やたとえ話を使って説明しました。その観察力はたいそう優れていました。ある時、サンキヤ哲学のプルシャとプラクリティについて信者たちに説明したことがあります。プルシャは何にも属さず、常に穏やかで静か、澄み渡っていて、何からも影響を受けません。プラクリティはサットワ・ラジャス・タマスの三つのグナの行動とともに常に活動的です。シュリー・ラーマクリシュナはこのことを若い娘の結婚式という特別なイベントに例えて話をしました。家の主婦であるお母さんは、計画、指導、すべての準備、来客のお世話などで大忙しです。一方でその家の主人は静かにリラックスしてクッションの上で水ギセル（フーカー）を吸っています。忙しい主婦（プラクリティ）はときどき主人のもとに行き、さまざまな手続きの進捗状況を知らせます。主人（プルシャ）は、うん、うん、とうなづきますが、身の回りで起こっている何にも影響を受けていません。これが、シュリー・ラーマクリシュナがプルシャとプラクリティを説明した方法です。私たちがサンキヤ哲学のプルシャとプラクリティについて学校で学んでも、正確に理解することは非常に困難です。しかし、このような簡単な例でシュリー・ラーマクリシュナはその要点を伝えました。

**神はすべてであり遍在**

万物・万人の背後には神が存在する、神がすべてとなられた、そのことをシュリー・ラーマクリシュナは、患者は神、病気も神、医者も神、薬も神である、という具体的な例で説明しました。そして次のようなたとえ話をしました。

*ある地主が何かの理由で小作人に腹を立てた。あまりに腹が立ったのでその小作人を打ちすえた。たまたまそれを見た僧が地主にやめるように言ったのだが、地主はやめるどころか僧まで殴りつけた。あまりにひどく殴られた僧は意識を失った。*

*僧が地主に殴られて意識を失ったことを、誰かが彼の僧院に知らせた。すぐに兄弟僧たちが駆け付け、そこに横たわっている僧を見つけ僧院に運んだ。兄弟僧たちは傷の手当てし、風を送り、ぬれた布で顔を拭き始めた。僧が正気づいたようだったので、少しミルクを飲ませることにした。すると僧はゆっくりと目を開けたが、本当に意識を取り戻したかどうかよくわからなかったので、いくつか質問をすることにした。ひとりの僧が大声で尋ねた。「マハーラージ、あなたは誰がミルクをあげているかお分かりですか？」*

*けがを負った僧は非常に弱々しい声で「はい、わかります」と答えた。*

*それだけでは納得できなかったので兄弟僧はさらに尋ねた。「それでは誰が今、あなたにミルクをあげていますか？」*

*僧はもう一度弱々しく答えた「私を殴ったお方が私にミルクを飲ませていらっしゃる」*

☞（『ラーマクリシュナの福音』146頁）

　この話で大事なことは、ただひとつだけが存在する、そのひとつの存在が僧を殴り介抱した、善も悪もなく、男性女性もない、国籍も宗教の違いもない、ということです。すべての形を取っているのは、神ただおひとりです。「すべてのポットの中にいるのは、ラーマおひとりです」

**子供のような信仰**

霊性の生活で大事なことは信仰です。とても清らかで純粋な人は本当の信仰を持つことができます。そしてそれは「子供のような純粋さ」と言われています。子供はお母さんが言うことは何でも信じて疑いません。もし、お母さんが見知らぬ人を「この人はあなたのおじさんですよ」と言うと、子供は100パーセントその人をおじさんだと信じます。もしお母さんが「そこへ行っちゃだめ、お化けが出るのよ」というと、お化けに会うのが嫌でそこに行きません。シュリー・ラーマクリシュナは次のような古くからある物語を話しました。

*ある男の子が森の中を通って学校に通っていた。森は深くて暗く、道の両側は木々が並んでいた。男の子がひとりでその森を通った時、とても怖い思いをした。*

*後で男の子は森をひとりで歩くのが怖かったことを母親に話した。母親は言った。「怖いことなどあるものですか。あなたにはマドゥスダン兄さんがいるでしょう？」　マドゥスダンとはシュリー・クリシュナの一名で、『悪魔マドゥを殺した者』という意味である。「もし森で困ったことが起きたら、マドゥスダン兄さんをお呼びなさい。そうすれば助けてくれます！　彼があなたを護ってくれます！　だから恐がらないで！」*

*男の子はお母さんの言葉を信じて再び学校へ行くのに森を通ったのだが、また恐ろしくなったので、「マドゥスダン兄さん、マドゥスダン兄さん、マドゥスダン兄さん、どこにいるの？　僕、怖いよお！」と言って泣き出した。しかしマドゥスダン兄さんはあらわれない。男の子はもっと大きな声で「マドゥスダン兄さん、お母さんがね、お兄さんが来てくれるって言ったよ！　ねえ、どこにいるの！　僕、とっても怖いんだよ！」と言ってさらに涙を流すと、マドゥスダン兄さんの姿をした主クリシュナがあらわれた。主クリシュナは男の子を慰めながら言った。「どうして泣くんだい？　ほら、来たよ。これからはずっとおまえさんを守ってあげるから、もう怖がらなくていいよ！」　　それからというもの、男の子が森を通るといつも主クリシュナがあらわれて護ってくださった。*☞（『ラーマクリシュナの福音』306頁）

信仰という考えを深めるためにシュリー・ラーマクリシュナがお話になったもうひとつのとても感動的な話があります。幼児婚が当たり前の時代、インドも例外ではありませんでした。

*その当時、ある女の子が年配の男性と結婚した。夫が亡くなると、女の子は幼くして未亡人になってしまった。女の子は、結婚や夫、妻の意味がまだ分からなかったので、夫を失ったということを理解していなかった。女の子が少し大きくなると、夫がいる周りの友達はとても幸せそうなことに気づいた。ある日、女の子はお父さんに尋ねた。「お父さん、私の旦那さんはどこですか？　皆、旦那さんと一緒で幸せそうなんです。ねえ、私の旦那さんは？　どうしてここにいらっしゃらないの？」*

*女の子をなだめる他の方法を思いつかなかったお父さんは言った。「娘よ、ゴーヴィンダ（主クリシュナの別名）がお前の旦那さんだよ。彼を呼びなさい、そうすればあらわれてくださるから」*

*女の子は自分の部屋に戻って、涙にぬれながら泣き叫びました。「ゴーヴィンダ！　どこにいるの！　私の旦那様なのに、どうして私のそばに、ここにいらっしゃらないの？」　女の子は何日も泣きながらゴーヴィンダにそばにいてくれるように懇願した。ついに主クリシュナがあらわれて言った。「私はゴーヴィンダ、お前の旦那さんだよ。だからもう泣かないでおくれ」*☞（『ラーマクリシュナの福音』305頁）

これらの話は信仰について語っています。息子が森を歩くのを怖がった時、母親はマドゥスダン兄さんが保護者になってくれる、と保証しました。その次の話では、夫が亡くなったことを理解できない女の子に父親が、お前の旦那さんはゴーヴィンダだ、と言います。それに納得した女の子はゴーヴィンダがあらわれるまで泣き続けました。これらは子供のような信仰の例です。マドゥスダンやゴーヴィンダは本当に存在しており、私たちを護るためにきてくださる、ということを、大人である私たちは信じるでしょうか？　いいえ。なぜなら私たちは純粋さ、つまり子供のような信仰を失ってしまったからです。年齢を重ねるにつれ、疑いや混乱が自分の中に徐々に増えていきます。

**信仰と信仰心のなさ**

これから申し上げるシュリー・ラーマクリシュナが話したたとえ話は、信仰と信仰心のなさ、の両方の例です。

*ある男が海を渡ろうとしていた。ヴィビシャナ王（ラーマーヤナ叙事詩の中で、魔王ラーヴァナが主ラーマに殺された後、セイロンの王になった方）が一枚の葉にラーマの御名を書き、その男の服の端に結わえて言った。「恐れるでない。信仰をもって水面を行きなさい。しかし、服に結わえたものへの信仰をお前が失った瞬間、溺れるだろう」*

*男はいとも簡単に水面を歩き続けた。突然彼は服に結わえてあるものが何か、どうしても見たくなった。男が服の端をほどいてみると、ラーマの御名が書かれた一枚の葉だけがあった。「これは何だ？」　「ラーマの御名だけじゃないか？」　男の心に疑いが入った瞬間、男は溺れてしまった。*

☞（『ラーマクリシュナの福音』14、38頁）

　もう一つ、シュリー・ラーマクリシュナがお作りになった信仰と信仰の欠如に関する話をします。

*乳しぼりの娘が川の片岸に住んでいた。娘は反対岸に住むブラーミンに毎日新鮮な牛乳を運んでいた。娘は毎日、渡し船を待たなければならなかった。渡し船の船頭は時間にだらしなかったので、娘はしょっちゅうブラーミンに牛乳を届けるのが遅れた。あるときブラーミンはイライラして乳しぼりの娘に腹を立てて言った「どうして牛乳が届くのがこんなにもおそくなるのだ？」　「もっときちんと届けられないものか？」*

*娘は答えた。「尊いお方様、私は川の向こうから船に乗って牛乳を持ってきているのですが、その船頭が時間通りに来ないのでございます」*

*「なんだって！？」とブラーミンは叫んだ。「人は主、ハリの御名を唱えることで、世俗の海全体を渡るというのに、お前はこの川も渡れないのか！」*

*それからというもの、娘がきっちりと牛乳を届けるようになったので、ブラーミンは不思議に思った。ブラーミンは尋ねた。「いったいどうしたというのだ？　あんなに時間がまちまちだったのに、今ではきっちりと牛乳を持ってくるではないか？　何があったのだ？」*

*これに驚いた娘は答えた。「どうしてでございます？　あなた様が私にその方法を教えてくださったのではないですか！」*

*「ええ？　私が何と言ったかね？」*

*「先日、あなた様はハリの御名を唱えよ、とおっしゃいました」　「私は川を渡れるのでございます。それからというもの、私はハリの御名を唱えながら川を歩いて渡っているのでございます。それだけです」*

*驚いたブラーミンは叫んだ「本当かい？」　「では見せてくれたまえ」*

*「わかりました。私と一緒にお越しになってください。とても簡単でございます」*

*二人が川岸につくと、乳しぼりの娘は「ハリ、ハリ、ハリ」と唱え始めた。そして川岸から川に足を踏み入れた。*

*それを見ていた信仰が薄く疑い深いブラーミンも「ハリ、ハリ、ハリ」と唱え始めた。しかし彼は服が濡れないように持ち上げて川に足を踏み入れた。*

*「それではだめです！」と乳しぼりの娘は叫んだ。「ハリ、ハリ、ハリ、と唱えながら、服が濡れることを心配なさるとは。それでは川は渡れません」*

中には信仰心の浅い人もいます。それではいけない！　信仰を深めなさい、そうすればラーマ、クリシュナ、ラーマクリシュナの御名を唱えることで、世俗の海を渡ることができます。

今日はシュリー・ラーマクリシュナのたとえ話とその意味について話をしました。今日、家に持って帰ることができるのは、神様ただおひとりが名前と形を持つすべてのものになっている、ということです。つまり、私たちは神を探すのではなく神を見なければなりません。神を探さないで、神を見てください！　そのためには信仰が必要です。聖典の言葉への信仰、グルの言葉への信仰、神への信仰、そして最終的にスワーミー・ヴィヴェーカーナンダがおっしゃったように、「自分自身への信仰」を持ってください。